

報告書(体育研究所プロジェクト研究)

21世紀スポーツ運動学構築のための基礎的研究

Fundamental Studies for Reconstruction of 21st Century Sporting Exercises

山 本 徳 郎

Tokuro YAMAMOTO

は じ め に

数年前から、私は「21世紀オリンピズム構築のための基礎的研究」というテーマのもとで、21世紀のわれわれの領域の在り方を模索してきた。その考えの底には、「スポーツ運動学」の21世紀的再編（深化）を進めたいという希望も含まれていた。「21世紀スポーツ運動学」というのは、これまでの多くの運動学的研究にみられたような、既成の科学から「運動」に接近し、それを分析して構成したり、考察したりする方法を逆転させ、我々の行っている「運動」から出発し、その内部に潜む様々な現象を掘り起こし、体系的学術的な研究を進めるプロセス（方法）であり、集大成された成果であらねばならないと考えている。

国士館大学体育学部附属体育研究所は、設置されてから数年後に30周年を迎える。その間体育やスポーツにかかわる諸問題を、個人研究、共同研究の方式で継続的に行い、すでにその成果を報告する所報は23巻までになっている。これまでの研究を通覧してみると、そこには常々スポーツや人間の動作の指導に携わり、その技術的な解明、戦術的な工夫、指導のメカニズム等に日夜苦心し、経験を蓄積しているメンバーの苦労の結晶が示されている。今後は更に、我々の現場に存在する指導成果誕生のプロセス、戦術、指導上の諸手続き、

そこで用いられる言葉、言説、具体的内容等の諸現象に注目して、それらを調査・発掘する作業をすすめ、「21世紀スポーツ運動学」が構築されることを期待したい。

平成14年4月から、私は体育学部附属体育研究所の所長を仰せつかった。その前年度に「所報」が第20号を数えたことを記念して、秋に研究会を開催した。発表者には記念すべき第20号に寄稿されている方から下記の三名を選ばせていただいた。それは大学院スポーツ・システム研究科が三つのコースに分かれていることも考え、それぞれのコースを担当される方々でもあった。

当日発表をお願いした方々と、第20巻へ投稿された論文のタイトルは以下の通りであった。

竹中敏文 低酸素下における循環器系の応答：

生理学的検討

滝山将剛 レスリングの競技力向上のための攻撃と防御に関する研究（第6報）

－2001年世界選手権大会と全日本選手権大会の比較－

時本識資 ミャンマー（ビルマ）のスポーツ構造と競技者育成システム

この研究会の後、私はそれぞれのご発表について次のようなコメントをしていた。内容が「21世紀スポーツ運動学構築」に関連しているので、若干修正をしてここに付記させていただくことを

お許しいただきたい。

その年のノーベル賞には、立て続けに二人の日本人が選ばれたが、そのニュースは、我々に大きな衝撃を与えていた。受賞されたお二人とも会見の中で、繰り返し基礎研究の重要さ、必要性を述べておられたことが印象的であった。医学の領域は応用的研究であるのかもしれないが、竹中先生のご報告に見られる内容は、我々の研究領域にとっては大きな応用可能性を秘めた基礎研究と言えるのではないかと思った。これまでの基礎研究的研究には、応用可能性をあまり感じさせない研究のための研究というものが多かったように思っていたので、先生の基礎研究をするにあたっての取り組み方、問題意識の持ち方に新鮮を感じた。さらにDNAドーピングの問題にもふれながら、競技者は近い将来、メダルか生命かの選択を迫られる時代がくるのではないかとおっしゃったことが印象的で、以後の私の原稿にはときどき借用させて頂いている。

本学部にとって、競技力向上は大きな課題である。入試制度等の中で強化策は講じられているようであるが、十分成果を上げているとは言えない。一定の目的に向かって人間（からだ）を作り変えていくのがコーチングの使命だとすると、もっと目的に適った研究方法が期待される。その年の日本体育学会でなされた「岡部平太研究」（第53回大会号203頁）に、「スポーツの本質を理解し、如何に勝つかを課題にしたスポーツの科学的研究の必要性を時代に先駆けて提唱。」とあった。滝山先生のご研究からは、単なる競技力向上だけではなく、勝つことへの意欲を感じ取ることが出来た。もっともこの領域は企業秘密的要素もあるのでどこまで公表していいものか、難しい問題も含んで

いると思うが、今後もこの領域の充実が国士館大学体育学部の命運を担っていると言っても過言ではないと考えている。「21世紀スポーツ運動学」の構想もこのことと無関係ではなかったのだ。

本学にとって勝利至上主義的スポーツは現在尚大きな意味を持っている。しかしこの考えは20世紀の遺物になりつつあるのも事実である。従って研究所としては21世紀のスポーツのあり方を模索する使命も帯びていると考える。スポーツ後発国であった日本を初め非欧米諸国は、スポーツの世纪とも言われる20世紀を通して近代スポーツの吸収につとめ、一定の成果を収めてきた。地球上には現在尚多くの低開発地域が存在しているが、そういう地域へのスポーツ導入問題は21世紀のスポーツのあり方を考えさせる多くの問題提起を含んでいる。このところ連続してアジアの経済小国に注目してきた時本先生には、実態報告だけでなく、21世紀のスポーツのあり方への示唆も与えていただいた。

平成14年に行われたこの研究会は、時期的には「21世紀スポーツ運動学」の構想以前であったが、私のコメントから考えると、すでにこの時期から考えていたことのように思える。

「21世紀スポーツ運動学構築のための基礎的研究」は平成17年度の課題であったが、前年度の3月10日に、準備会として最初の研究会を開催した。その冒頭に片岡暁夫教授から「運動学に期待する」というテーマで話していただいた。さらに、最終回の研究会で報告してくださった朝倉利夫助教授の内容も、ご提出下さった原稿を掲載させていただいた。なお、本年度の研究会のプログラムは下記の通りであった。

研究会開催報告

① 平成17年3月10日（木） 15時～17時

研究会の主旨説明	山本徳郎
運動学研究への提言	片岡暁夫
実践的研究の具体例	(山本)
スポーツ運動学と医学	松本高明

② 平成17年5月26日（木） 15時～17時

ハンドボールにおけるアテネオリンピック優勝チームのゲーム分析	吉田久士、岡本大
新記録樹立にいたる投擲選手の具体的トレーニング・プログラム	青山利春
スポーツ運動学研究と工学の立場	永嶋秀敏（体育研究所特別研究員）

③ 平成17年9月29日（木） 15時～17時

テーマ：体操研究の課題－採点競技の体操・新体操－	
体操・新体操のながれと今日	朝倉正昭
体操の現状と将来	堀江健二・小林幸子
男子新体操の国際化と現状	福井利勝

④ 平成17年11月10日 15時～17時

オーストラリア・スポーツの現状	朝倉利夫
-----------------	------